

## 国文学研究資料館報

第11号

昭和53年 9 月

## 人文科学とコンピュータ

西村 恕彦

私が電子計算機（コンピュータ）

のことで国文学研究資料館に何うようになつてからすでに何年もになりますが、その間、館長はじめ館の方々が、電子計算機の導入に心をあわせ、力をあわせて努力していらつしやるのを、大変気持ちよく見て参りました。

電子計算機を導入する場合に、一番むずかしいのは、新しい統合されたシステムを構成するというものであろうと思います。個別に見れば、単体としての計算機や漢字システム、またアプリケーションでいえば個別の文献索引、語彙索引といったものは、以前からあったのですが、それらをどのようにして統合するかが非常にむずかしいことであります。

システム作りということ

研究は、多くの場合分析的ですが、統合された物を作る時には、それと全く違った発想や構想力、さらにその構想に向かって推進する動力が必要になります。

そうした統合されたシステムを作る場合、注意しなければならないことが一つあります。それはあまり手を伸ばし過ぎないことです。便利そうなものは何でも取り入れるというものが、よくやる失敗です。私はよく「何もしないシステムをお作りなさい」といつております。もちろん文字通りとられては困りますが、目的を定めたら余計なサービスはやめなさいということですね。えてして七つ道具のついたナイフのように、欲張つて

## 目次

人文科学とコンピュータ：西村恕彦………	1
公開講演会・展示活動………	8
国文学研究資料館の利用 井上宗雄………	3
委員等名簿・人事異動………	10
研究者の立場から 浜田啓介………	4
文献資料部事業報告………	12
大久保正………	12
英国における〈書誌活動〉の伝統	
研究情報部事業報告………	13
古川清彦………	13
在外研修報告………	5
永田治樹………	5
昭和五十三年度秋季学会開催一覽………	16

結局使いにくいものになります。目的を狭くし過ぎて仕事のできない電子計算機では困りますが、一般的には発散する危険の方が大きいと思います。

## 次期のシステム

電子計算機については、今特殊な事情があつて、毎年毎年値段が安くなるという状況にあります。数年経つと、同じ機械の賃借料は半分くらいになります。そこで予算を少なくしてしまつと大変なことになります。その時には、いったん計算機を返して、同じくらいの経費でもつとよい新しい計算機にかえるべきです。その時の危険は、とにかく一番よいシステムを考えて、それまでうまく動かしてきたのだから、同じようなシステム構成で、もう少し性能のよい機種を入れようという誘惑にかられることです。しかしそれでは発展がありません。国文学研究資料館は、今の時点で一番よいシステムを考えてこられました。それと同じよう

に、数年後のその時点で一番よいシステムを設計すべきです。電子計算機は今なおはげしく発展しています。また一方国文学研究の要求も当然変化してくるでしょう。それを取り入れてゆかなければならぬだろうと思います。

そうはいつても、今日の披露式に間に合わせようと、今システム作りに死に物狂いでがんばつていらした方々は、それどころではないとお考えかも知れませんが、今から将来を考えられるように、トップの方々のサポートをお願いしておきたいと思っています。

## 研究は競争

少し話が変わりますが、私が通産省の研究所で十五年間研究生活をしてきて感ずることは、研究が競争の面を持っているということです。どんなに素晴らしい研究でも、誰かがやってしまった後では、ほとんど価値はありません。少なくともブライオリティはありません。その競争の面



で電子計算機は、重要な役割を果たすだろうと思います。

一番重大な競争は何かということ、は、このごろになってやっとわかってきました。自分の年齢という持ち時間との競争です。若いころはそんなことは考えずにガムシヤラにやってきましたが、いいかげん経つと、もうこれからいくらがんばってもという見当が何んとなくついてきますし、第一がんばるファイトも弱くなってきます。しかし電子計算機を使えば、その持ち時間をうんと長くすることが出来ます。たとえば総索引を作る仕事は、今までは何人も何年もかかる仕事でした。電子計算機

を使えば、それを半分あるいは三分の一に縮めることが出来ますし、一度つくっておけば、他のいろいろ違ったものに作り直すこともできるという点で、持ち時間を長くすることが出来ます。

#### 道具としての計算機

もっと明らかな競争は、いうまでもなく同じ分野で仕事をしているほかの人との競争です。電子計算機でできない研究もたくさんあることは十分承知しておりますが、もし同じことをやるとした場合、一方の人が道具として電子計算機を利用することができ、他方の人が利用できないとすれば、利用できる方がはるかに有利です。たとえば、電子計算機をもつこの資料館で研究できる人と、そうでない人との差は、やがて出てくると思います。また、残念なことに、何といっても米国の方が電子計算機の利用が進んでいるので、外国との競争が起ってくるのが考えられます。国文学だから日本人でなければできないと、高をくくっていらつしやる方もあるかと思いますが、私はそれほど話簡単ではないと思います。今日いただいた国文学研究資料館報10号を見ますと、最初にドナルド・キーン氏の講演が載ってお

り、その次には国際日本文学研究集会の報告が出ております。外国で電子計算機をふんだんに使える人、自分で使わなくても、使って仕事をできる立場の人が、早く、よい成果を出すということが考えられます。その時一つの行き方は、電子計算機を使わない研究へ撤退することですが、電子計算機による、ナタで彫刻を作るような、大味だが大きな構想の研究も大切であることを、忘れてはならないと思います。

#### 隣接分野

第三の競争は隣接分野との競争です。たとえば国語学では、先ほど水谷静夫先生が言われましたように、すでに電子計算機が使われております。隣接領域で電子計算機が使われると、目に見えない圧力が、いや応なしにかかってくるだろうと思います。もしそうした隣接分野からの競争に挑んでゆかなければ、人文科学の中での国文学の相対的地位が低下し、衰微してゆかざるを得ないであろうと、大変おこがましいのですが、思っております。

そこで、国文学の研究に電子計算機を使用するとした時に、注意しなければならぬことがあります。すでに皆さんよくご承知と思いますが、

コンピュータという言葉に惑わされないことです。この研究はコンピュータを使つたからどうのとハッタリをかけることは、他の分野でもあることです。国文学の分野でも起こるかも知れません。しかしハッタリに負けないで、本当は何なのかという批判の目を持ちつづけることが必要です。学問の世界に権威主義があると、コンピュータが新しい権威になるおそれがあります。国文学の世界がそうでなければあまり心配はいりませんが。

#### 人文科学と計算機

さて、国文学研究資料館に、いよいよ計算機が入るということをうかがった時、一つの異常といつてもよい現象が起っているのに気がつきました。それは人文科学の分野で、どこに電子計算機が入っているかという事です。国立国語研究所以前から導入されており、今年は国文学研究資料館のほか、アジア・アフリカ言語文化研究所に導入され、そのほか、国立国会図書館と日本科学技術情報センターが現業的に電子計算機を使っています。まだほかにあるかも知れませんが、今こう並べてみますと、言葉を扱う研究所とか図書館とか、そういうところにひどく

偏って入っていることに気がつきま  
す。それでいながら大学には入って  
いません。大学にないといつてしま  
うと、たとえば水谷先生の東京女子  
大学にはあるわけですが、それは主  
として工学部などが主となった共同  
利用の計算機です。つまり、人文科  
学とコンピュータという今日の講演  
のタイトルにびつたりするものは、  
大学にはないのではないかとと思わ  
れます。これは非常に変なことです。

### 計算機の教育

これからは、人文科学の研究と電  
子計算機の専門家が協力して何かす  
るというのでは限度があつて、一人  
の人が両方できるようにならなくて  
はなりません。とすれば計算機の専  
門家に国文学を教育するのは逆で、  
国文学など、人文科学の教育をする  
機関で電子計算機の教育を行なうべ  
きだと思ひます。国文学の研究は、  
やはり今更ですと大学が主体であ  
つたと思ひます。それなのに、なぜ  
大学が電子計算機を入れようとしな  
かつたか。人文科学の教育と研究を  
する文学部に、電子計算機が入って  
いないといふことは、異常なことでは  
ないかと思ひます。教育を行なう  
ところで、電子計算機を使える若い  
研究者の層を厚くしておかないと、

国文学研究資料館のような大学を卒  
業した人の入ってくる機関は、少し  
言い過ぎかもしれませんが、根なし  
草になつてしまふおそれがあります。  
大学を出て、国文学研究資料館へき  
て、はじめて電子計算機を扱う現場  
の仕事をするのでは、今後は遅過ぎ  
ますし、層が薄くては、よい人材を  
得て、新しい構想で仕事を進めるこ  
とが困難になるだろうと思ひます。  
資料館が卒研生を受け入れることも  
一案でしょう。

これは今日のような記念講演にふ  
さわしい話ではないかもしれせんが、  
国文学研究資料館が、天下に孤  
立して一つあるというのではなくて、  
広い裾野の上に立ち、それがさらに  
人文科学の広い研究の中に位置づけ  
られなければならないのではないかと、  
まわりとの競争もあつた方が、国文  
学研究資料館の発展のためにもよい  
のではないかと思ひます。このこと  
を特に今日の講演の最後の問題点と  
してあげておきたいと思ひます。  
大へん勝手なことを申し上げて失  
礼いたしました。——拍手——

——昭和五十三年三月二十七日(月)  
国文学研究資料館計算機システ  
ム披露式における特別講演要約

(国文学研究資料館情報検索委  
員、東京農工大学教授工学部、  
究官)

当時電子技術総合研究所主任研  
究官)

## 国文学研究資料館の利用

### 研究者の立場から

井上 宗雄

資料館の利用について書くように、  
と依頼され、軽く引き受けてしまつ  
て、いざ書く段になつて次第に後悔  
の念が強くなつて来た。

利用はよくする方だが、不満や注  
文があるというわけではない。つま  
り書きたねに乏しいのである。そこ  
で、大変申し訳ないのだが、図書館  
と私とのかわり、ということにつ  
いて書きながら、資料館について言  
及する、という方法をとらせていた  
だくことにする。

特別図書館や一般公開図書館を、  
図書館学の専門家を別とすれば、私  
は、かなり多く訪れている方であろ  
う。数えたことはないが、三百館近  
く参上したであろうか。何のためか、  
といへば、和装本歌書の「新種(?)」  
を求めてである。和歌は、久しい間、

日本文学史上、第一芸術であつたか  
ら、歌書はちよつとしたコレクショ  
ンならたいい存する。発見したら、  
私の「歌壇史研究」や歌人伝調査に  
組みこむわけだから、中古・中世に  
成立した歌書は、すべて私の研究対  
象になる。

国鉄の全線に乗つたという篤志家  
(?)が、「時刻表二万キロ」という  
本を書いた。早速入手して実に楽し  
く読んだが、曲乗りのようにスリル  
に富んだスケジュールを見て、大変  
身につまされもした。私も勤めを持  
つ身だし、経済的な理由もあるから、  
訪書旅行の日程はかなり窮屈である。  
お目あての図書館と閲覧希望の本が  
分っている場合は、時間も量れるが、  
この辺の城下町に下車して図書館や  
郷土館に参上しよう、というような

場合には、綱渡りのような旅程になつて、苦心して書架の奥から出して下さった十点の歌書を十五分で拝見することもある。研究者というのは、学問の大義名分をちらつかせながら、その実きわめて身勝手なのだが、その勝手を寛恕し、更にさまざまな配慮をえた時の嬉しさは、何ともいいようがない。

私自身の上記のような研究方法と対象から、公開図書館では、許される範囲で多くの本を見せていただくのだが、こんな僅かな時間に、こんなに沢山見られるわけがない、と、こちらに身勝手ががあるものだから、つい司書の方がそんな顔つきをしているように見えてしまう。御迷惑であろうと痛感しているから、図書館の管理者にはできるだけ腰を低くするようにしている。

無辞を連ねて申訳ないが、要するに、閲覧者の側にも、研究方法や対象によつて本の見方は千差万別であり、また個人的事情によつて極端に窮屈な閲覧時間しかない場合があることを申してみただけである。こういった事情は、普通の図書館では理解していただきにくい時もあるが、資料館の場合は、充分に配慮していただけたと思うし、現在その面での

不満は全くない(因みに、冒頭に、利用面での不満は全くないように記したが、複写代が少々高いのは残念である)。

閲覧室の空間にゆとりがあり、管理面で差支えない限り、蔵書はなるべくオープン(開架式)にしておいて下さると有難い。私など人間が古いせいか、どんなにマイクロフィルムやコピーが発達しても、本そのものを手にとり、若干の頁を繰つてはじめてその本について何らかの印象を語ることができる。また私は、なるべく先入観を持たず本を眺めることを心がけている。見る前に価値判断を薄めておくとなれば、書棚の片端から一冊ずつ見る外はない。そのようにしてオープンの書架から学んだものは絶大である。

現在、資料館で開架となつている基本図書、雑誌・紀要、写真製本は便利貴重この上ない。更に望むらくは、例えば、大日本史料の類もオープンにし、雑誌・紀要で製本されたものでも近年のものは開架にするなどの措置(要するに開架図書を多くすることである)をとっていただけると有難い。現在どこの大学も、研究室や読書室は手狭であり、蔵書も充分とはいえない。開架図書が多

い程、学生諸君が資料館の便利さを知つて、活用しに来るであらうこと

は火を見るより明らかである。

(立教大学文学部教授)

## 国文学研究資料館の利用

——研究者の立場から——

浜田 啓介

実を言えば、私は表題の文章を書く資格を十分には満たしていない。そのサービスを受けに資料館の門を入つたのは、最近一度だけである。

それも、極くすんなりと所期の目的を果してしまつたからである。つまり、引つ掛けて、物の一つも言いたくなるというような、負の経験をしていない。勿論、今後の何十百度の資料館訪問に際し、負の経験なしにすまず事が出来れば、それが理想的である。

私は、先づ、資料館が、外部からの来訪者に対し、信頼を置いてくれていて、利用者管理を専一とするような扱いを受けなかった事にほつとした。それは応待する人の方も質的なレベルを維持しているからであらう。入り口で猜疑の眼で扱われる事

の不愉快さは、お互に経験済みである。資料館は未だうい／＼しくつて、小役人根性を示していない。この事は嬉しい。

私はマイクロフィルムをリーダーで読ませてもらうという事をした。リーダーの機器や座席やリストの検索や資料を手にするまでの時間などにも、全く負の印象を持つ事は無かつた。製本済コピーの書棚が開架式になつているのも好ましい。そこら辺の雰囲気が開放的である事が良い。例外的な事故が将来起つたとしても、なお開放的な方針は維持して欲しい。私は、最も単純な利用者であつた為かも知れないが、資料閲覧の目的を記入させられるという事は無かつた。だから複写請求や貴重書閲覧の経験を経なければこういう発言はで

きないのだが、それらの場合にも、その事を記入しないですまされれば有難い。コピーを出版物にして流布させるといふ場合には、当然制約が設けられるべきであり、特別の申告が必要であるが、私達の普通の利用目的は、読書か研究かの外は無いからである。

これらを総じて、現状に於ては、資料館のサービスマンは、なかなか結構であるといふ事である。収納資料のリストを研究者に流してくれているといふ事も、その結構な事に属する。

そして、当然の事ながら、現状では資料の収集という点では大いに未完成である。

そこで、私が最も懸念する事は、現状が、未完成なるが故に最も便利自由であつて、完成するにつれて、事が不自由にむつかしくなりはしないかといふ事である。差出がましい物言いを寛恕して頂きたいのだが、指導的立場にある人達と、カウンタ―で直接来訪者と接する若い係員との意志の疎通が十分にあって、若い人びとが、国文学の研究といふ本館の目的とその特質に深い理解を持ち、研究者の側に立つて活躍して欲しいといふ事であり、それは現在好まし

く行なわれているように思われる。今後、規模が大きくなり、人員も多くなり、人事の管理も、物品の管理も一層複雑になった時にも、その新鮮さを維持して、よき伝統を育成して欲しいといふ事である。

些事であるが、資料のラベルに書名の誤記が無きにあらず。かかる事務的な俗事にも、専門の方々の点検指導を煩わしたい。

蒐書の方が、大いにピッチをあげて進んでいるのには一驚を喫した。大学の研究室から見ると、資料館の購入能力は大変羨ましく思う。資料館所蔵の本については、それらの利用研究に於いて、できる限りの自由さ、寛大さを将来ともに保つて欲しい。ある資料が某々大学の手に入らずに資料館の手に入った事を、研究者が祝福するような、そういう資料館であつて欲しい。その反対の事態が生じたならば、目も当てられない事だと思ふ。

私は完全主義者では無い。完全主義の立場からは、現状の資料館の有効性に対する批判は脱れ難いであらうが、私は未完成でもその存在がより有益便利であることを確信している者である。故に私は本館の漸進的な充実を庶幾して止まない。願わく

は、うい／＼しさを忘れずにと言いたいのである。

(京都大学教授教養部)

## 英国における「書誌活動」の伝統

### ——在外研修報告——

永田 治樹

滞在期間も残り少なくなつて、長く陰うつな英国の冬がやつと終りかけたころ、この研修のしめくくりのつもりで英国図書館協会(The Library Association: LA)の「目録および索引グループ」の年次総会を兼ねた週末セミナーにてみた。金曜日の夕刻、参加者がシェフィールド大学の学生寮に集まり、月曜の朝の解散時まで、朝9時半から夜9時すぎまでのスケジュールは外国人の私にとってはかなりきつかった。外人といへば、英国図書館(The British Library: BL)に「おそらく交換派遣できている議会図書館の米人一人が私のほかにただで、本米国内会議だから私の語学力では歯がたたなかつたというわけである。セミナーでは案に相違して、ちょうど改訂中の『英米目録規則 第2版』(Anglo-American Cataloguing Rules. 2nd ed.: AACR II)の話題はさして出なかつた。このセミナーはLAのセミナーのうちでも最も活発で有意義なものとUNIBID (UNISIST Information Centre on Bibliographic Descriptions)の事務所へ訪問して以来いろいろ援助してくれたAホブキンズ君も強調していたし、参加者をみわたしてみると改訂AACR II委員会の議長のP. ルイスなど英国の目録専門家が顔をそろえていたのだから、必要ならば論議もされたと思う。実はAACR IIについての評判を知りたかつた私にとっては少々期待はずれであつたのだが、セミナーの焦点がそこにあつたわけではなかつたし、この状況を英国では(米国ではな／＼)AACR II.



の委員であるにもかかわらずである。  
ESTC としたのは18世紀出版物  
目録 (The Eighteenth Century  
Short Title Catalogue) のア  
ロニスムで、英米両国の共同作業に  
よって18世紀の英語出版物の総合目  
録を機械で編集しようという試みで  
ある。

周知のように英語出版物の過去にさ  
かのぼった書誌といえば、W.ボラー  
ドとG.R.レドグレイブによる A  
short-title catalogue of books  
printed in England, Scotland,  
& Ireland... 1475-1640

であるがこのいわゆる STC は  
ほぼ完全なものと評価されており  
(現在改訂中、その一部 I-N  
の第2巻は1976年にすでに刊行)、そ  
で18世紀のものをそれに積み上げよ  
うという意図をESTC はもっている。  
計画としては第一フェーズ1977年  
から1984年の間に50万件をこえるデー  
タを整理する予定であるが、現在ま  
でのところ、さきに述べたようにBL  
が18世紀出版物の再整理を兼ねると  
いうことで、米国側より英国側での  
作業が先行し、資金問題で「国際政  
治」と悪口をたたかれながらも想像  
以上作業は進んでいる。  
図に示したような書誌データを18

世紀出版物からつくり、協力館のば  
あいはそれに標題紙等に必要箇所  
のコピーをつけ、ESTC に送る。

ESTC はBL蔵書のデータを作成  
しさらに各種の典拠ファイルを整  
理しつつ、データの確認作業をして  
いる。18世紀を専門とするR・アル  
ストンのもとで十数人博士号をとつた  
ばかりの若い人々の作業場における  
雰囲気は、当館での目録作業の状況  
と似ていると思ったが、典拠ファ  
イルの整備、調査作業の系統性など高  
い水準で作業が進んでおり、正直に  
いってうらやましく思った。

BLの同僚たちから、ESTCはその精力的な  
産産体制ゆえに「チープ・レーバ  
ーのドクター達」と同情とも感心と  
もつかぬレッテルがはられていて苦笑  
せざるをえなかったが、このプロジェ  
クトの成果はいずれ確かな形になつて  
あらわれるのではないかと思えた。  
話をとにもとそう、ジョリフに  
してもアルストン (ESTCというよ  
りもこの際彼の名をあげておく、実  
際に二人を比較して云々する人もい  
る) にしても、共通して古書の杉大  
な書誌づくりにとりこんでいる。さ  
らにもう一つ話を合わせてみれば  
UKMARCの趣及分が、先発した米国  
議会図書館のものよりも大きくなつ

Fourth Year of the French Republic.

1795.

## DRESSES

OF THE

REPRESENTATIVES OF THE PEOPLE,

MEMBERS OF THE TWO COUNCILS,

AND OF THE

EXECUTIVE DIRECTORY:

ALSO OF THE

MINISTERS, JUDGES, MESSENGERS, USHERS,  
AND OTHER PUBLIC OFFICERS, &c. &c.

From the original Drawings given by the Minister of the  
Interior to Citizen GRASSAT S. SAUVREUR.

The Whole illustrated by an historical Description,  
translated from the French.

PARIS: PRINTED FOR DEBRY:

L O N D O N:

PRINTED FOR E. AND J. HARDING, PRINTER, NO. 98, FALMOUTH.

1796.

ているなど、感覚的な表現になつて  
しまつてうまくはないが、英国にお  
ける「書誌活動」の層の厚さとい  
うかその強じんな伝統のようなもの  
をみたように思う。いずれがブラグ  
マチックであるか、いずれが現実的  
であるかをここでは問わない。ただ双  
方のあり方も機械処理を古い伝統に  
ちこんで新しいそれを作りあげよう  
という伝統を生かえらせて、伝統を  
守つてゆく姿勢があることを感得し  
るのである。エドモンド・パークの  
ように真の伝統主義者は伝統のよき  
ことを理解するがゆえに伝統を破壊  
するという伝統があるというロジッ  
クであろうか。

蛇足としていえば、再び雪にうも  
れたシェフィールドからロンドンの  
下宿にもどつて、ラジオからきこ  
てきたタイアナ・ロスの Do you  
know where you're going? Do you  
like the things that life's showin'  
you?...  
という歌に日本の自らの状況を思い  
浮べていた。パークに先だつ18世紀  
英国はセンチメンタルな国でもあつ  
たことも。

(整理閲覧室)

## 公開講演会・展示活動

当館は設立の趣旨に沿って詩歌、物語、演劇などに関する日本古典籍とその研究を普及するために公開講演会、展示（一般公開）を行ってきました。

公開講演会は当館が設置された昭和四七年から本年六月まで八回、この夏には三日間連続の夏期講演会を予定しています。会場は朝日講堂などを借用しましたが、昨年、当館の建物が完成して以後は大会議室（二階）で開催し、毎回、満員の盛況です。聴衆は大学生、大学院生が多く、次いで一般社会人、年配の方も多いようです。現在のところ毎年の六月、十一月、三月の土曜日午後とその他に八月に三日間連続の夏期講演会を開催する年間スケジュールが組めそうです。

展示（一般公開）は開館以降、展示室（二階）において特別展示——当館貴重書、寄託書、他の所蔵者からの出品を中心とし、期間は一週間——を三回、常設展示——当館蔵書（複製本を含む）を展示——を二回開催しました。今後、年間スケジュール

ールとしては特別展示（一週間）を二回、常設展示（二ヶ月）五回を目標に準備をすすめています。

### 公開講演会

第一回 昭和四七年一月九日（木）  
一七・三〇—二〇・三〇時 会場、朝日講堂 主題「古典と現代」

平家物語の女性 作家・永井路子  
万葉の歌人たち 学習院大学教授・五味智英

第二回 昭和四八年六月二日（木）  
一七・三〇—二〇・三〇時 会場、朝日講堂

芭蕉と奥の細道 お茶の水女子大学教授・井本農一

朔太郎と蕪村 詩評論家・伊藤信吉  
第三回 昭和四九年一月七日（木）  
一八・〇〇—会場、朝日講堂

源氏物語をどう見るか 東京大学教授・授・秋山虔

源氏物語と和歌 実践女子大学教授・木俣修  
第四回 昭和五〇年一月八日（土）  
一三・三〇—会場、主婦の友ビル三階ホール

### 新収資料紹介 ⑨

三國物語（さんごくものがたり） 版本五冊

伝本が少なく、かつて山崎麓氏「日本小説書目年表」（昭4）の「散逸物語目録（み部）」に登載された。国書総目録は、それを受けたか、「みくにものがたり」と記載、西尾市立図書館岩瀬文庫のみが唯一の所蔵先となっている。はやくに、寛文十年刊の「書籍目録」の「仮名和書」の部や、延宝三年刊の「新增書籍目録」の「さ假名」の部に出る。後者の延宝三年目録に従って、「さんごくものがたり」と呼ぶべきであろう。また、元禄十二年刊の「新版増補書籍目録」には三冊として登場。これに相当するのは後述の広島大学本と思われる。

赤木文庫旧蔵。改装の表紙（菊菊染）に、題簽貼付、墨筆で「三國物語一（一五）」。半紙本（タテ二四・七センチ、ヨコ一八・二センチ）。柱刻「三國卷一（一五）」。刊記「三國物語五之巻終 吉野屋惣兵衛ノ寛文七」\*初夏吉日 開板。比較的、美本にして、初刷に近いと思われる。

内容は、三國の説話を、我朝・唐・天竺の順で配列し、その単位を繰り返す。「三國伝記」とは逆順の編纂方法である。卷一、三十話。卷二、二十七話。卷三、二十四話。卷四、二十七話。卷五、三十話。計一三八話。「神道集」などに見られる富神の本縁譚（卷三第三二話）や民間伝承の絵姿女房譚（卷一第三三話）といった興味ある説話を始めとして、「沙石集」「撰集抄」「宝物集」「三國伝記」といった中世説話集や、「ひそめ草」「智忠鑑」「列女伝」等の仮名草子類との同話が数多い。

広大な三冊本は、無刊記にして、それぞれの内題に「天竺物語（柱刻「三國」）、十三話」、「大唐物語（「三國」）、十一話」、「我朝物語（「三國」）、十一話」とある。当五冊本と対応する説話本文は同文だが、絵柄が異なる。当本の抜出改編本と見ておくべきか。

（徳田 和夫）



古典本文と定家 宮内庁書陵部図書

調査官・橋本不美男

読みと言葉 当館教授・松田修

国文学の資料的研究の意義 東京大

学名誉教授・久松潜一

第五回 昭和五一年一〇月三〇日

(土)一三・三〇〇 会場、お茶の

水女子大学一般教育一号館

青本・黄表紙の絵題箋のことなど

大妻女子大学教授・浜田義一郎

仏教説話画について 文化財保護審

議会専門委員・梅津次郎

第六回(開館記念講演会) 昭和五

二年一〇月一日(土)一三・三〇〇

会場、当館大会議室(以下同様)

東西の日記文学 大妻女子大学文学

部長・吉田精一教授

日本文学史について コロンビア大

学教授・当館外国人研究員・ドナ

ルド・キーン

第七回 昭和五三年三月四日(土)

一四・〇〇〇 主題「国文学と久松

潜一博士

昭和期の万葉集研究 当館教授・

大久保正

久松博士のこと 東京教育大学名誉

教授・山岸徳平

第八回 昭和五三年六月二四日(土)

一三・三〇〇 主題「古今集前後」

古今集の伝統 当館教授・福田秀一

古今集の歌の疑問語について 東京

教育大学名誉教授・佐伯梅友

第一回夏期公開講演会(三日間連続、

一三・三〇時より)

昭和五三年八月二四日(木)

源氏物語の成立と読者たち 当館助

教授・伊井春樹

伊勢物語の虚構の方法 大阪女子大

学教授・片桐洋一

八月二五日(金)

一九・三馬の滑稽本——俗談平話文

芸の成立 当館教授・本田康雄

西鶴・やさしさの美学 当館教授・

松田修

八月二六日(土)

尾崎紅葉 青山学院大学教授・岡保

生

森鷗外——歴史と文学 当館教授・

古川清彦

展 示

一、開館記念特別展示

期間 昭和五二年七月二五日〜三〇

日

見学者数 約二二〇名

主題「国学者自筆稿本と奈良絵本を

中心として」

国学者自筆稿本(二五五点)は国立

教育研究所からの移管本、奈良絵本

(一五五点)は当館所蔵及び東京大学

国文学研究室からの出品、その他に

当館蔵の貴重書数点を出品。

なお、第一回国際日本文学研究集

会(十一月一〇・一一日)に同上

テーマで開催。

二、第二回特別展示

期間 昭和五三年三月四日〜一〇日

見学者数 約二五〇名

主題「久松博士蔵歌論書及び本館蔵

国文学関係書を中心として」

久松家から寄託された故久松潜一

博士蔵歌論書の一部(六〇点)と国

立教育研究所からの移管本数点を

出品

三、第三回特別展示

期間 昭和五三年六月二四日〜七月

七日

見学者数 約三三〇名

主題「古今集——初雁文庫蔵本を中

心として」

故西下経一博士の御遺族から寄託

された初雁文庫の内から古今集を中

心に選書(五一点)し、当館蔵の貴

重書(三点)を併せて出品。

四、常設展示

①期間 昭和五二年二月六日〜五

三年三月一日

見学者数 約二五〇名

主題「日本文学史」

上代から各時代、各ジャンルの日

本古典籍とその複製物(三七七点)を、

写本、版本、卷子本、冊子など各種

の形態を揃えて出品。

②期間 昭和五三年四月一日〜九月

二二日

見学者数 約四〇〇名(八月末日

現在)

主題「八犬伝とその周辺」

八犬伝を中心として、その他の馬

琴の作品数点を揃えて出品。

(参考室長 本田康雄)

※公開講演会、展示についての問合

わせは当館参考室(七八五―七一

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。

三―内線四二二)へお願いします。



## 国文学研究資料館評議員名簿

(任期昭和五十二年七月一日～五十五年六月三〇日)  
阿部 秋生 (実践女子大学文学部長 東京大  
(学名譽教授)

石井 良助 (東京大学名譽教授)

臼田 甚五郎 (国学院大学文学部教授)

小田切 進 (立教大学文学部教授 日本近代  
文学館理事長)

久曾神 昇 (愛知大学長 愛知大学理事長)

児玉 幸多 (学習院大学長)

小栗田 淳 (京都大学名譽教授)

小林 清 (福島大学教育学部教授)

齋藤 正 (東京国立博物館長)

佐々木 八郎 (早稲田大学名譽教授)

佐藤 喜代治 (フェリス女学院文学部教授 東  
北大学名譽教授)

谷山 茂 (京都女子大学長)

手塚 富雄 (共立女子大学文学部教授 東  
京大学名譽教授)

豊田 武 (法政大学文学部教授 東北大学  
名譽教授)

野間 光辰 (皇学館大学文学部教授 京都大  
学名譽教授)

秀村 選三 (九州大学経済学部教授)

宝月 圭吾 (東京大学名譽教授)

松尾 聰 (学習院大学名譽教授)

松田 智雄 (図書館短期大学長 東京大学名  
譽教授)

山本 達郎 (国際基督教大学大学院教授 東  
京大学名譽教授)

昭和五十三年年度  
国文学文献資料収集計画委員会委員名簿

尾形 仙 (名城大学文学部教授)

金子 金治郎 (東海大学文学部教授)

菊地 勇次郎 (東京大学史料編纂所教授)

後藤 重郎 (名古屋大学文学部教授)

阪倉 篤義 (京都大学教養部教授)

築島 裕 (東京大学文学部教授)

中田 剛直 (上智大学文学部教授)

橋本 不美男 (宮内庁書陵部総理事務官図書  
調査官)

浜田 義一郎 (大妻女子大学文学部教授)

水野 稔 (明治大学文学部教授)

昭和五十三年年度  
文献目録委員会委員名簿

浅井 清 (お茶の水女子大学文教育学部教  
授)

大矢 武師 (初中局中学校教育課教科調査官)

久保田 淳 (東京大学文学部助教授)

篠原 昭二 (東京大学教養学部助教授)

杉本 邦子 (昭和女子大学文政学部助教授)

瀬戸 仁 (初中局中学校教育課教科調査官)

曾倉 卓也 (青山学院大学文学部助教授)

浜野 卓也 (東京都立上野高等学校定時制教  
育)

山口 明徳 (東京大学文学部助教授)

昭和五十三年年度  
国文学研究資料館情報検索委員会委員名簿

石綿 敏雄 (茨城大学教養学部教授)

稲岡 耕二 (東京大学教養学部教授)

桜井 宜隆 (図書館短期大学教授)

西村 忍彦 (東京農工大学工学部教授)

堀内 秀男 (東京医科歯科大学教養部教授)

水谷 静夫 (東京女子大学文学部教授)

山本 毅雄 (東京大学大型計算機センター助  
教授)

昭和五十三年年度  
国文学文献資料調査員名簿

(北海道・東北)  
伊藤 敬 (藤女子短期大学教授)

井上 隆明 (秋田経済大学経済学部教授)

高橋 伸幸 (札幌大学女子短期大学部助教授)

橋本 朝生 (山形大学文学部講師)

原田 貞義 (若手大学教育学部助教授)

松野 陽一 (東北大学教養部教授)

青木 賢豪 (日本大学短期大学部助教授)

浅見 和彦 (成蹊大学文学部専任講師)

有川 美穂男 (群馬大学教育学部教授)

伊藤 博 (実践女子短期大学専任講師)

加藤 裕一 (早稲田大学文学部助教授)

雲英 末雄 (早稲田大学文学部助教授)

小池 正胤 (東京大学文学部専任講師)

佐藤 久 (関東短期大学専任講師)

嶋中 道郎 (日本大学文学部助教授)

杉谷 寿 (東京大学文学部助教授)

橋本 武 (成城大学文学部助教授)

杉尾 武 (成城大学文学部助教授)

外村 南都子 (白百合女子大学助教授)

土井 洋子 (学習院大学文学部助教授)

中島 尚 (千葉大学文学部助教授)

中山 武司 (専修大学文学部助教授)

中田 尚 (共立女子短期大学専任講師)

延広 真治 (東京大学教養学部助教授)

村松 友次 (東洋大学短期大学教授)

和田 英道 (跡見学園女子大学文学部専任講  
師)

(中部)  
岩下 武彦 (名古屋学院大学専任講師)

宇野 茂彦 (愛知教育大学教育学部助教授)

岡本 勝 (愛知教育大学教育学部助教授)

上条 彰次 (静岡女子大学助教授)

久保 哲夫 (都留文科大学文学部教授)

桜井 治男 (皇学館大学講師)

島津 忠夫 (愛知県立大学文学部教授)

杉浦 豊治 (金城学院大学教授)

高橋 亨 (名古屋大学教養部講師)

田中 喜美春 (岐阜大学教育学部助教授)

西友 千代治 (愛知県立大学文学部助教授)

野田 千平 (金城学院大学文学部講師)

長谷川 端 (中央大学文学部助教授)

濱田 森太郎 (三重大学教育学部講師)

増田 欣 (富山大学教育学部教授)

森角 正一 (愛知県立大学文学部講師)

角倉 一 (山梨県立女子短期大学助教授)

安田 文吉 (南山大学文学部講師)

(近畿)

新井 栄藏 (奈良女子大学文学部助教授)

大橋 正叔 (天理大学文学部助教授)

越智 美登子 (滋賀大学教育学部講師)

阪口 弘之 (大阪市立大学文学部講師)

竹下 豊 (大阪女子大学文学部助教授)

真鍋 昌弘 (関西外国語大学外国語学部助教授)

水田 紀久 (関西大学文学部教授)

宗政 五十緒 (龍谷大学文学部教授)

(中国・四国)

朝倉 尚 (岡山大学教養部助教授)

小泉 邦生 (広島大学文学部講師)

佐藤 恒雄 (愛媛大学文学部助教授)

竹本 宏夫 (下関市立大学教授)

田村 憲治 (愛媛大学文学部講師)

徳満 澄雄 (高知女子大学文学部助教授)

横井 金男 (香川県立短期大学教授)

(九州)

横山 邦治 (広島文教女子大学文学部助教授)

今井 正之助 (長崎大学教育学部講師)

江口 正弘 (熊本女子大学文家政学部助教授)

工藤 重矩 (福岡教育大学教育学部助教授)

田中 雄雄 (鹿児島大学教育学部助教授)

中野 三敏 (九州大学文学部助教授)

中本 利昭 (熊本大学教育学部助教授)

米介 利昭 (佐賀大学教育学部助教授)

昭和五十三年度

国文学文献資料特別調査員名簿

井上 博嗣 (京都女子大学文学部教授)

近藤 瑞男 (共立女子大学文学部専任講師)

下房 俊一 (島根大学文学部助教授)

徳田 武修 (明治大学法学部助教授)

名和 修 (財団法人陽明文庫主事)

宮本 瑞夫 (立教女学院短期大学専任講師)

昭和五十三年度

国際日本文学研究集會委員名簿

池田 重 (千葉大学教育学部教授)

井本 農一 (聖心女子大学教授)

白田 甚五郎 (国学院大学文学部教授)

長谷川 泉 (医学書院編集長)

ドナルド・キーン (コロンビア大学教授)

昭和五十三年度

共同研究委員会委員名簿

秋山 虔 (東京大学文学部教授)

稲賀 敬二 (広島大学文学部教授)

佐竹 昭広 (京都大学文学部教授)

神保 五弥 (早稲田大学文学部教授)

松崎 仁 (立教大学文学部教授)

※各委員会の館内委員は省略

昭和五十三年度

共同研究員名簿

尾形 功 (成城大学文学部教授)

片桐 洋一 (大阪女子大学文学部専任講師)

加藤 定彦 (立教大学一般教育部専任講師)

川村 晃生 (慶応義塾大学非常勤講師)

小谷 照彦 (東京学芸大学教育学部助教授)

滝沢 貞夫 (信州大学教育学部助教授)

谷地 快一 (東洋大学附属牛久高等学校教諭)

原岡 文子 (共立女子短期大学専任講師)

森川 昭 (東京大学文学部助教授)

人事異動

(昭和五十三年二月～同五十三年七月)

(採用)

昭和五十三年四月一日

文部教官 (研究情報部助手)

文部教官 (史料館教授)

文部教官 (史料館助手)

(転入)

昭和五十三年四月一日

管理部庶務課長

(千葉大学より)

(転出)

昭和五十三年三月一日

史料館手

(北海道大学へ出向)

昭和五十三年四月一日

管理部庶務課長

(信州大学へ出向)

(辞職)

昭和五十三年三月三十一日

研究情報部助教授

(四月一日、日本大学就職)

(併任)

昭和五十三年四月一日

文部教官 (文献資料部教授)

(広島大学より)

(非常勤講師)

昭和五十三年四月一日～五十四年三月三十一日

文献資料部

(横浜市立大学より)

原 道生

(横浜市立大学より)

# 文献資料部事業報告

## 大久保 正

当館が待望の開館を迎えて、はやくも一年有余を経過した。いざ蓋を開けて見ると、われわれが最善を尽くしたと信じて行なつて来たことにも、なお程々の問題があり、理想の実現の道のりは遠いことを痛感せざるを得ない。しかしながら、この六年間の反省と将来への展望の上に立つて、さらに努力する所存であるので、いっそうの御理解と御鞭撻とをお願いしたい。

本号には、例によつて昭和五十二年二月以降、六月末日までに当館が行なつてきた事業の概略を報告することとする。

文献資料収集の概況

昭和五十二年度の事業として、五十三年一月末日までに文献資料調査員の協力を得て当館で収集したマイクロフィルム資料の概況についてはすでに前号で報告したが、脱落があったので、左記を加える。

中央大学図書館 一二二点  
謹んで種々便宜を図られた中央大学図書館に対し疎漏をお詫びする。

昭和五十二年度収集箇所・点数は三十八カ所、計四〇四九点、および東京大学附属図書館竹冷文庫蔵本既成市販マイクロフィルム一七九点、計四二七三点で、ほかに国会図書館蔵古書人名典撰ファイルカード等をマイクロフィルムで収集した。

昭和五十三年度国文学文献資料収集計画委員の委嘱について

本年度の収集計画委員として、再任五名、新任五名、計十名の方々に委嘱し、四月一日付をもつて発令された。(別紙名簿参照)

昭和五十三年度国文学文献資料調査員の委嘱について

本年度の文献資料調査員として、北海道・東北地区六名、関東地区二十名、中部地区十九名、近畿地区九名、中国・四国地区九名、九州地区七名、計七十名の方々(別紙名簿参照)を委嘱した。ほかに、特定事項についての調査・収集に御協力いただくための特別調査員若干名を予定している。

国文学文献資料収集計画委員会の

### 開催

五月十六日、当館中会議室において開催、本年度の調査収集計画について説明し、意見を交換、程々有益な助言をいただいた。調査に当たっては文献資料の伝来の経路・事業等・を明らかにするため、各所蔵文庫等について全点調査が望ましいとの意見があった。また、収集文献資料を充実するため、フィルム寄贈等の条件でのみ撮影を許可される文庫等についても、今後収集を実施できるような格段の努力をしてほしいのと、全員一致の要望がなされた。

国文学文献資料調査員会議(総会)の開催

五月二十三日、当館大会議室において開催した。その次第は左の通りである。

- 一、開会の辞
- 二、館長挨拶
- 三、議事
  - (1) 昭和五十三年度文献資料調査員委嘱について
  - (2) 昭和五十二年までの文献資料調査収集結果について
  - (3) 昭和五十三年度文献資料調査収集計画について
  - (4) 当館からの要望
  - 四、研究情報部長挨拶

### 五、質疑応答

六、国文学文献資料調査要領の説明及び質疑応答

### 七、閉会の辞

### 八、地区別打合せ

### 文献資料部第四室の活動

時代別に編成されている当部三室の調査研究及び収集作業を、ジャンルの面から補強する目的をもつて昭和五十二年から開設されている第四室の客員として、本年度は広島大学教授中川徳之助、横浜市立大学助教授原道生の両氏が非常勤の併任として就任、それぞれ日本漢文学の文献資料調査・収集の計画立案、東京芸術大学所蔵文献資料をはじめとする演劇関係の文献資料の調査・収集の実施等に協力されている。

国文学文献資料調査報告書の作成

当部の部内業務用として、昭和五十二年の調査員の調査報告に基づき、「国文学文献資料所在調査目録・昭和五十二年度」を本年五月に作成刊行した。なお、昭和五十二年において調査員から御提出いただいた調査カードは、書目カード、細目カード合せて一万八千点に達した。これは今後の文献資料収集のための基礎資料となるもので、調査員諸氏の多大の労に對し、深甚なる謝意を表する。

# 研究情報部事業報告

古川 清彦

国際日本文学研究会・公開講演会・展示等の開催計画、『マイクロ資料目録』、『逐次刊行物目録』、『国文学研究文献目録』等の目録作成、さらにはコンピュータの稼動による目録編集や資料管理業務の機械化等が活気を帯びてきている。以下各室毎にその状況を報告する。

(一)情報室。本年二月、前年開催の第一回国際日本文学研究集会の会議録を作成、各方面へ郵送した。また第二回同研究集会開催のため参加募集要項等を作成して事務を進行中である。なお館報第十号も本年三月発行した。新聞情報は昭和四十九年九月以降五十一年十二月までの部分を索引化しており、参考業務等に使用できる状態になった。また学会情報の収集、当館未所蔵雑誌の調査なども続行している。

(二)整理閲覧室。(1)受入。新しいシステムによる流れは、しだいに円滑になり、受入時点での滞貨はほとんどなくなった。一月から六月までの圖書の受入冊数は一、八七一、三月三

十一日現在の継続的に受け入れている逐次刊行物のタイトル数は八四八である。寄贈冊数の受入冊数に占める割合は十三%だった。(2)整理。マイクロ資料の目録は、昨年作成した三、九二六点に加えて、五月までに蓬左文庫等の目録二、〇一一点を作成した。これに、七月中に作成される東大秋葉文庫等の目録二、三四九点を追加して、合計八、二六八点を収録した『マイクロ資料目録』を刊行する計画である。新刊書の滞貨も減少しつつあり、受入後比較的早い時期に、整理済の図書を二階閲覧室に展示している。逐次刊行物目録は増訂して刊行する計画である。

六月から和古書の記述目録と人名索引ファイルについてのワーキング・グループが走り出した。(3)閲覧。当館の事業が広く知られるのにもなつて閲覧者数も増加している。とくに複写申込の件数が増加しており、一月から六月までの件数は六七七件であるが、一月〜三月期と比較すると四月〜六月期は五八%の伸びを示

## 新収資料紹介⑩

伝大炊御門経名筆『河海抄』松風巻

本書は『河海抄』の松風巻だけの卷子本一軸で、巻初に付された極めによると大炊御門経名の書写という。もとは冊子本だったらしく、縦「五三センチ、横一八・五センチ」の鳥の子紙十九枚を、裏打ちして貼り合せたものである。表紙は紺地銀泥菊花模様、外題はなく、巻末にも識語の類を持たない。

『河海抄』の伝本には、今日知られているところでは中書本と覆勘本、さらにその混態本がある。しかし、中書本といっても項目・注記内容ともに複雑な出入りがあり、截然と区分するのは困難と言えよう。覆勘本とてそれは同じことである。そういった中であつて、経名本松風巻は中書本の系統として位置づけられる。

初めにも述べたように、巻初には「大炊御門殿経名公 第十三松風（印）」の極め札が貼付される。経名は右大臣信男息、文明十二年生れ、彼も永正十八年に右大臣に昇進、大永三年に散位となり、天文十一年（六十三歳）には出家して心源と号した。しかし、「諸家伝」その他にも没年は記されていない。天理図書館には伝経名筆須磨巻の蔵されるのを見ると、源氏物語と無縁な存在ではなかったようで、筆跡は不明だが室町末の書写本であるのは確かである。なお極めの印記は、古筆鑑定家朝倉茂入（道順）のものである。

(伊井 春樹)



している。他館からの相互利用の申込みも、昨年と比べて約二倍の伸びを示し、一月から六月までに一三三件の申込みを受付けている。閲覧管理システムとして設計を始めた機械化されたシステムは多様な機能をもりこんで、図書資料管理システムと名称を変え、近く稼動を開始する。(4)組織。四月一日付で阿部好臣助手が着任し、また歌野博事務官が東京工業大学から着任した。六月十六日付で受入係・整理係・閲覧係の三係の体制になり、それぞれ水田治樹・内藤英雄・歌野博が係長あるいは係長心得となった。

(三)編集室。前年度に引き続き「国文学研究文献目録」の五十一年分、五十二年分、五十三年分を編集集中であり、五十一年分は十二月に刊行の予定である。なお五十二年分以降は研究年度に変更の予定である。つまり、従来の雑誌紀要論文目録・単行本解説の他に、学界展望あるいは学会の研究発表、公開講演会のニュース、その他国文学界の動向を幅広く収録する計画である。

(四)参考室。参考質問の受付・回答・参考質問票(質問要旨、回答ならびに事後処理、典拠文献など記入)の蓄積に努めている。参考開架閲覧室

の利用者も増加しつつあり、その期待に応えて参考図書の充実に努めている。国文学の普及のための公開講演会、展示活動を企画、実施することとも当室の重要な任務であるが、別掲のごとく、「公開講演会・展示活動」(参照)講演会は年三回および夏期講演会、展示は特別展示年二回・常設展示五回の年間スケジュールを決定した。

(5)情報処理室。昭和五十三年一月四日から当館の計算機が稼動し、プログラムの開発を開始した。三月には先に作成したマイクロ資料目録のデータを利用して「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録」の簡略版を作成するシステムを開発し、当館の機械による最初の成果として出版した。なおこれを機会に、三月二十七日(月)関係機関、関係者に対し、電算機システムの披露式を行い、またその際、当館の計算機導入について種々助言をいただいた西村恕彦情報検索委員に「人文科学とコンピュータ」と題する別掲の特別講演をお願いした。

さらに、当館の計算機システムの機器構成および使用文字の選定等についてとりまとめた「国文学研究資料館報告No.1、国文学研究資料館におけるコンピュータ及び漢字システム」を作成し、関係方面に配布した。

ム」を作成し、関係方面に配布した。本年度は七月からオペレータの契約を行うなど運用体制を整えるとともに、オンラインの資料管理システムを開発し、整理閲覧室と協力して資料の所在問い合わせ、利用者登録、貸出し管理など業務の機械化を進めており、近く実用化される段階にある。このほか、前回の目録以後当館で収集整理したマイクロ資料約八二一六、八点のデータの入力、および既存の「国文学研究文献目録」のデータの入力蓄積を実施中であり、またこれらの入力にともなう、若干保留してあった漢字の追加選定を引き続き行っている。なお四月一日付で星野雅英事務官が電算機取扱主任になった。

\*マイクロ室。(1)一月から六月までの間に、五十一年度に収集したマイクロフィルムのうち、三五〇リールについて閲覧用ポジフィルムを作製し、二七リールについて紙焼写真本を作製した。(2)同じ時期に、五十二年度収集分のうち六一八リールについて第二ネガフィルムを作製した。(3)収集のための撮影の一部として、館内および東京国立博物館において個人所蔵の資料を二七リール撮影した。(4)複写要求に応じるための用意

として、貴重書および特別コレクションを一九リール撮影した。また閲覧カウンターでの複写申込を受けて、三三点の撮影と七点のポジフィルム作製を行った。(5)四月にマイクロ室運営委員会は図書資料委員会に吸収併合された。なお四月一日付で内藤衛亮助手がマイクロ室主任になった。

#### 国文学研究資料館報告No.1

国文学研究資料館における

コンピュータ及び漢字システム

#### 目次

1. コンピュータ導入の経緯
2. コンピュータシステムの紹介
3. システム開発
4. 漢字字種選定報告・追加基準

別表1 漢字フォント一覧  
別表2 鍵盤文字表

一九七八 国文学研究資料館

(※情報処理室にご連絡下さい)

## 評議員会議の開催について

本年度評議会が七月十四日（金）に開催され、石井良助氏が議長に、松尾聰氏が議長代理となつた。議事は管理運営の概況、来年度概算要求、本年度事業等についての館側からの説明に対し、評議が行われ有益な助言等をいただいた。

なお、部会の構成は次のとおり決定した。

国文学部会	史料部会
○阿部 秋生	◎石井 良助
石井 良助	白田 甚五郎
白田 甚五郎	兄玉 幸多
小田切 進	小葉田 淳
久曾神 昇	小林 清治
斎藤 正	佐藤 喜代治
佐々木 八郎	○豊田 武
佐藤 喜代治	野間 光辰
谷山 茂	秀村 選三
手塚 富雄	宝月 圭吾
野間 光辰	松田 智雄
◎松尾 聰	山本 達郎

（備考）

◎印は部会長

○印は部会長代理

## 共同研究委員会の発足について

当館では昭和五十二年度から共同研究を実施してきたが、本年度国文学研究資料館共同研究委員会の設置が認められ、当館の教授五名、国文学に関する学識経験者五名、計十名をもって構成される委員会が設けられ、今後は、共同研究の計画及び実施に関すること、共同研究委員の選考に関することはすべて当委員会において審議、館長の諮問に応じることとなった。

そこで右委員会の規程に基づき五名の学識経験委員が館長から委嘱され、発令を見た（別項名簿参照）。（委員長 大久保正）

## 共同研究

昭和五十二年度

前号で途中まで報告したように、「国文学文献資料の解題研究」ということで、

- A 国文学における文献資料の解題研究、特に当館における共同研究としてのそれは、いかにあるべきかを、具体的に検討する。
- B その実践例の意味を持たせて、初雁文庫本の解題研究を行う。

A テーマについては一応十分な討議

を尽くした。またBテーマについては、分担執筆原稿を相互に点検するという方式で約七〇点の解題を行ったが、これは初雁文庫本で解題を要するものの半分弱に当る。

昭和五十三年度

今年度の予算枠も昨年度と同じく「国文学文献資料の解題研究」なので、昨年度の成果を受けて次の二つのテーマを立て、研究員を委嘱し、（別項名簿参照）各班に分れて討議・作業を行うこととした。

- 1、昨年度のBテーマを続行して、初雁文庫本の解題を一応完了する。（仮称初雁班）。
  - 2、版本の解題はいかにあるべきかを、特に俳書を中心として討議し、具体的に研究する。（仮称俳諧班）。
- そして両方とも、去る七月二十日にスタートして、八月から十二月までの間に数次にわたって、当館で会合し、研究を進める予定である。
- （担当責任者 松田・福田）

## 主な来館者

東京史跡伝説めぐりのつどい（80名）  
橘豊（茨城大学付属図書館長）  
Staeley, Ronald（ロンドン大学図書館学校）  
横浜国立大学教育学部国語科（11名）  
源流の会（5名）  
立正大学文学部国文科（120名）  
日本大学杉山ゼミ（30名）  
ジェームス・荒木（ハワイ大学教授）

図書館短期大学（50名）  
橘女子大学（17名）  
国学院大学文学部資料室（17名）

## ◇編集後記◇

▼去る三月二十七日の電子計算機および漢字システム披露式における、西村恕彦情報検索委員のお話は、大へん示唆に富むお話でしたので、その要約を掲載させていただきました。

▼開館以来早くも一年を経過いたしましたので、研究者の立場から、当館の利用についてのご意見を、井上宗雄・浜田啓介両氏にうかがいました。われわれ一同今後一層利用者のご期待に応えるべく努力してまいりたいと思っております。

## 昭和五十三年秋季学会開催一覽

## 情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会提出はアイウエオ順、以下①事務局（東京都は省略）②大会開催日③会場、の順。

解釈学会①豊島区北大塚三二九—二教育出版センター内②予定なし

近代語学会①世田谷区太子堂一—七昭和女子大学内②二月二日③昭和女子大学

国語学会①千代田区神田錦町三二—二武蔵野書院内②一〇月二—二二日③熊本大学

古事記学会①千葉県市川市国府台二—八—三東京医科歯科大学教養部歴史学研究室内②予定なし

古代文学会①八王子市上川町三八八—一高野正美方②予定なし

上代文学会①杉並区永福一—九—一明治大学和泉校舎大久間研究室内②予定なし

説話文学会①埼玉県上尾市戸崎八一—女子聖学院短期大学内②予定なし

全国国語国文学会①世田谷区太子堂一—七昭和女子大学日本文学

科研究室内②一〇月一三—一五

③梅光女学院大学

中古文学会①京都市上京区今出川通烏丸東入新北小路町同志社大学文学部国文学研究室内②九月三〇—一〇月二日③同志社大学

中世文学会①港区三田二—一五慶応大学文学部国文学研究室内②一〇月一四—一五③秋田大学

日本演劇学会①新宿区早稲田一—六—一早稲田大学演劇博物館内

日本歌謡学会①渋谷区東四—一〇—二八国学院大学文学部白田研究室内②一〇月一八—二〇日③皇学館大学

日本近世文学会①渋谷区渋谷四—四—二五青山学院大学日本文学研究室内②一〇月二—二二日③大阪女子大学

日本近代文学会①千代田区紀尾井町七上智大学文学部国文学研究室内②一〇月二—二二日③昭和女子大学

日本口承文学会①渋谷区東四—一〇—二八国学院大学文学部白田研

究室内②一〇月二八日③慶応義塾大学

日本文学会協会①豊島区南大塚二—一七—一〇日本文学協会②一〇月二八—二九日③早稲田大学

日本文学風土学会①世田谷区太子堂一—七昭和女子大学日本文学科研究室内②一〇月二五—二六日③昭和女子大学

日本文芸研究会①宮城県仙台市川内東北大学文学部国文学研究室内②一〇月二—二六日③東北大学文学部

俳文学会①豊島区目白一—五—一学習院大学文学部国文学研究室内②一〇月七—九日③岐阜大学教育学部

表現学会①愛知県愛知郡長久手町長湫字片平愛知淑徳大学国文学研究室内②予定なし

仏教文学会①横浜市鶴見区鶴見二—一—三鶴見大学日本文学科中間研究室内②予定なし

万葉学会①大阪府吹田市千里山東三—一〇月七—九日③龍谷大学

美夫君志会①名古屋市中昭和区八重本町一〇—一二中京大学国文学研究室内②予定なし

和歌文学会①新宿区戸山町四—二早稲田大学文学部藤平・上野研究室内②一〇月七—八日早稲田大学大隈

小講堂

2nd International Conference on Japanese Literature in Japan  
National Institute of Japanese Literature  
Tokyo, Nov. 16th, 17th, 1978

## 第2回国際日本文学研究集会

日程	1978年11月16日(木)、17日(金)
参加費	3,000円
11月16日	研究発表
11月17日	シンポジウム「19世紀における日本文学」
主催	国文学研究資料館
会場	国文学研究資料館
参加申込先	国文学研究資料館情報室

## 館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料として一号につき六〇円切手を同封して当館情報室あてお申し込みください。

国文学研究資料館報 第十一号  
昭和五十三年九月発行

編集・発行者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町一—六—二〇

郵便番号 一四二

電話 (七八五) 七—三二(代)

印刷所 株式会社 三興